

初恋ノスタルジア

目次

初恋ノスタルジア

5

未来からのラブレター

283

初恋ノスタルジア

## プロローグ

初めての恋がいつだったか——？

なんて、他愛ない会話を交わすことがある。

これって答えられそうできて、意外と考え込んでしまう問いかけじゃないだろうか。

『初恋』と呼ぶくらいだから初めての体験なわけで、どこからが恋といえるのかなんて曖昧なのに、記憶の糸を手繰り寄せるのは難しい。

ましてやそれが一目惚れなどではなく、青から紫を経て赤に変化を遂げるグラデーションのように、友情から始まり愛情へと移り変わっていくものだとしたら、なおさら「いつ?」「どこで?」「という瞬間を特定するのは困難だ。

だけど——私は友情が恋に変わったその瞬間を、今でもハッキリと思い出すことができる。

それは小学校一年生のとき。

相手は、家がお隣同士の幼なじみで、クラスメイトの男の子。

季節は夏だった。小学校から程近い美術館の中はセミの合唱を阻んでしんと静まり返っていたけ

れど、すぐに私たちの足音や笑い声などで賑やかになった。

引率の先生が窘めながら整列させ、順路に従い館内を回っていく。

生徒たちのほとんどが、見学は二の次。窮屈な教室から離れ、貴族のお屋敷のような厳かな雰囲気の間まですすんでるよ」

「まえ、すすんでるよ」

「……」

「ねえねえ、きいてる?」

そんな大多数の例からは漏れ、この課外授業を本来の意味で楽しんでいたのは、もしかしたら私だけだったのかもしれない。

すぐ後ろに並んでいた子に肩を叩かれても夢見心地だったから、おかしなヤツだと思われていたに違いない。特に、特別展示のフロアに入ってから、列から取り残されようが気にもとめず、一作品ごとに立ち止まっては、ただただ、豪華なフレームに囲まれた絵画をぼかんと見上げていた。

「おーい、あずさ」

他の子に大きく後れをとっていた私の名を呼んだのが——彼だ。

「こうちゃん」

私も彼の名前を呼び、ほんの一瞬だけそちらを見た。

「だめだろ、ちゃんとれつについてこなきゃ」

こうちゃんはちよつと慌てた口調で私を注意してきたけれど、クラス委員らしく「館内で大きな声を出してはいけない」という先生の言いつけは破らないように声を潜めていた。

これくらいの歳の子にしてはかなり真面目で賢い子だったと記憶している。

「うん」

良く言えばマイペース、悪く言えば協調性のない私は気のない返事をしただけだった。

彼の呼びかけに従わず、視線は上を向いたまま。瞳は「作品に触れないで下さい」という文句が添えられたロープの向こう側、一枚の絵画から離れない。

「……この絵がきにいっただのか？」

打つても響く心配のない私の隣に並び、尋ねるこうちゃん。私はこくと頷いた。

今日みたいな晴々とした夏の日差しの下、爽やかな草原で日傘を傾ける女性が振り返る姿。隣には、女性の子供と思しき男の子の姿もある。

そのときの柔らかな風が、光が、こちらにまで迫ってきたように感じ、無意識に目を細めた。

誰の何という作品かなんて知らなかったけど、まるで時空を超えて目の前にその光景が広がっているのではないかという錯覚に陥る。

「そっか。あずさもお絵かきしようずだもんな」

こうちゃんの感心した声が聞こえる。

あくまでお絵かきであって、画用紙にクレヨンや色鉛筆などで好き勝手にいたずら描きをしていたようなレベルだ。

紛う方なき、小学一年生のクオリティ。

それでもこうちゃんは、そんないたずら描きをいつも上手だと褒めてくれていた。

「……」

だけど私は、優しい彼の言葉にもろくに反応できないほどのショックを受けていた。

何かを見て、あんなに心を動かされることなんて、今になってもない。

まるで、雷に打たれたみたいで強い強い衝撃が、身体中を駆け抜けた。

だめだ、私なんかじゃとてもかなわない。完敗。完全敗北。

……本気で落ち込んだ。

美術館に飾られるような巨匠が描いた作品と、子供の描き散らかしでは比べることすら愚かしいというのに——ましてやこれは後に知ることになるのだけれど、かの歴史的名作だ。

わずか七歳だった私にとって、それまでの短い経験だけが世界のすべてだったのだから、仕方ないといえれば仕方ないのかもしれないけど……このときの心境を思い出すと、今でも恥ずかしいやらおかしいやらで笑ってしまう。

「わたし、こんな絵をかけるようになりたい」

素晴らしい作品にシビれた私は、落胆したのもつかの間、強い羨望を覚えていた。

誰に誓うわけでもなく、目の前の絵画に挑みかかる勢いで。

『が』になりたいてこと。』

こうちゃんが絵と私とをチラチラ見ているのを感じる。

画家という言葉を初めて耳にしたのはこのときだった。

『がか』？』

「絵をかくおしごとをしている人のことだよ」

「ふうん」

さすが、優等生のこうちゃんは物知りだ。

聞いたばかりの言葉の響きがやけにカッコよく思えて、力いっぱい頷いた。

「それじゃあ、わたし、『がか』になる」

『がか』になれば、こんなすごい絵を描くことができるんだ。

なら、なりたい。大きくなったらその『がか』になって、キレイな絵をたくさん描くんだけ。

子供ゆえの単純な思考ながら、心はもう遥か将来、二十年後の自分を見つめていた。

「なれるよ、ぜったい」

その返事には少しの揺らぎもなかった。

こうちゃんはいつでも私の味方。「そんなの無理だよ」なんて言わずに、快く背中を押してくれる。

「ほんと？」

「うん。ぼく、あずさの絵、すきだよ」

屈託のない笑顔で、濁りのない瞳で、こうちゃんがニコツと笑う。

——そのとき。

さつきとは違ふ——心臓をきゅうつと掴まれたみたいな甘い衝撃を受けた。

鮮麗な絵画が私を貫いたものよりも、もつと柔らかで繊細な衝撃。

幼かった私には、これがどういう感情なのかすぐには自覚できなかったけど。

その日を境に、こうちゃんへの想いは他の友達に対してとは違ふ特別なものへと変わっていった。

そう。私の初恋はあの暑い夏の日、大好きなモネの「日傘を差す女」の前で始まったんだ。

1

それから二十数年の時が流れ——私、結城梓は憧れの画家ではなく、至って平凡な高校の美術科教師となっていた。

\* \* \*

「待って下さい、教頭！ 実技科目はただでさえ単位を抑えられているのに、これ以上どう削れと仰るんですか!？」

私はたまたま椅子から立ち上がり、苛立ちに任せてデスクを叩く。

一日の授業を終えた放課後。肩の力が抜けた職員室に、一瞬にして緊張が走る。

まだ桜の花びらの舞う四月、年度初めなので新職員の紹介などを交え、比較的和やかに進んでいたはずの職員会議で、すべての職員の視線が私に集まったことを感じつつも私は興奮を抑えることができなかった。

我慢ならなかったのは、教頭が切り出したある議題についてだ。

私の様子を見て焦ったらしい教頭が、ギクリとした表情を浮かべた後、それをごまかすみたいなお顔を作ってこちらを向いた。

「ええと、今、他教科の先生方から出ている案としては、先ほど提示した教科の時間を、英数国のほうにですぬ」

「ですから私のお尋ねしていることは、これ以上削られて、どう授業を成り立たせるのかということです」

そんなことを聞いているのではない。教頭の言葉の上に被せてもう一度訊き直す。

なぜ、私がこんなに厳しい口調でものを申しているのかというと……

今、この高校では新授業改革案なるものの検討がなされていて、それが受け持ちの教科に大きくかかわってくるからだ。

全国的に名の知れた進学校である、私立成陵高校——ここが私の職場だ。

国立大学や難関私立大学への進学率が高く、学力の養成に力を注いでいる。

志の高い受験生であれば一度は、分厚い受験本やウェブサイトの入学案内をチェックしているに違いない。

そして偏差値の目安の欄を見てため息をついたりするんだ、狭き門だなあと。

ところがそんな天下の成陵高校も、ここ数年立て続けに、一流大学への進学率が落ち込んでいるという。実に致命的な問題だ。

そこで、英数国などの主要教科を受け持つ教師の間から提案が上がった。

それは、ペーパーテストに影響を及ぼさない芸術、技術家庭、体育などの時間を少し英数国に割り当てたらどうかというもの。

最初にその話を聞いたときは、耳を疑った。そして、その提案を受け入れた他の職員に対しても信じられない思いを抱いた。

実技科の時間を削る？

何をふざけたことを言ってるんだろう、と。

成陵が学力重視、受験重視の名門校なのは百も承知だし、私たちの受け持つ分野の教科が、入試に直接かわってくるものじゃないのは確かだ。内申点には影響するかもしれないけれど、その場合、気になるのは推薦入試の生徒だけだろう。

成陵高校にももちろん、大学の推薦枠はいくつかあるけど、生徒たちの中で推薦を希望する子は少ない。一般人試に勝負を懸ける子がほとんどなのだ。

……が、だからといってそのペーパーテストのために、他教科の単位が削られるのは納得がいかない。

私たち実技科の教師だって、少ない単位数でなんとかカリキュラムを終わらせようと必死なのだ。

現状だって十分とは言えない単位数をさらに減らされるのは非常に困る。

「何も授業をなくすと言ってるわけじゃないんだ、少し減らすだけでしょ」

呆れたようで、かつ嫌味つたらしい声が、対角線上にあるデスクから聞こえてくる。

ソイツは首元のネクタイをわずかに緩めながら立ち上がると、わざとらしく肩を竦めてみせた。成陵の職員室は、教科によりデスクのエリアが四分割されている。私のいるブロックは実技科エリア。隣が外国語科エリア。教頭のデスクはその二つの間にある。

実技科エリアの向かい側に、国語科と社会科のエリア。

——そして、たった今、不快な一言を放ったアイツのいる斜向かいには、数学科や理科のエリアがあるというわけだ。

……何その言い方。カチンときた。

「芸術の授業でも、一年間でかならず修了しなければならぬカリキュラムがあるんです！ そんな簡単に言わないで下さい」

「しかし成陵は学力重点校ですからね。生徒たちの学力が低下している今、こちらのほうに時間を回していただかないと」

「何ですって!？」

情の薄さを思わせる三日月のような唇が、にべもなく言った。

まるですぐに従うのが当然というような言い草に、まなじりを上げずにはいられない。

彼は、私の反応を楽しんでいるように見えた。瞳にたたえた悪意のある笑みが癪に障る。

「まあまあ、結城先生も山内先生も落ちついてください」

私と彼との間に走るピリピリとした空気を断ち切るため、教頭が身振りを交えて言った。

ハッと息を呑む音がした。隣の席、音楽科の月島先生だ。

彼女はきつと気が付いたのだ。この議題が、また面倒な採め事のキツカケになってしまったということに。

山内と口論になるのはこれが初めてではない。

以前にも一度、新授業改革案が議題に上ったことがあったけれど、そのときも意見の違いで真っ向から対立したのだ。

以来、顔を合わせるたびに、些細なことで言い争いになっているのだから、いまさら驚いたりはない。同僚たちから見れば、「また始まったか」くらいの日常茶飯事にすぎないのだ。

……もつとも、こうやって、「はなから相手にしていない」という態度をとるあたり、彼のほうは論争という認識すらないのかもしれないけど。

受け持ちの教科が違えば、思惑も違うし、価値観も大きく違う。

日頃から、この山内という教師とはウマが合わなかった。大きな理由は——

「大体ですね、山内先生には芸術を理解する心がないんだわ。だからそんな無神経なことが言えるんです」

彼が、美術や音楽などの芸術分野に対して関心が薄いという部分だ。

いや、直接尋ねてみたことはないけれど、こうして言葉を交わしていればひしひしと伝わってく

るのだ。

すると、山内は小馬鹿にした笑いのまま、静かに問い返してくる。

「芸術が生徒の大学合格を運んできますか。おめでたいことを言いますね、結城先生は」

——おめでたいこと、だって？

「な、な、何よつ、山内先生、私はですわね！」

……言い直す。芸術に対して関心が薄いどころか、蔑ろないがしにしている。

そこが不愉快で、腹が立つつていうのに！

山内の授業を受けている生徒に聞いたのだけど、彼の授業は一切の脱線がなく、極めて無駄のないコンパクトなもので、大手予備校のそれに近いと。

なるほど、今の言葉とあわせて考えれば頷けるうなず。

彼にとって重要なのは、生徒たちが入試でいい点数を取ることだ。だから、入試の科目に含まれていない芸術には、授業としての価値がない、と。そう思っている。

けれど美術科の教師としてはそれを認めるわけにはいかないのだ。

確かに、実技の科目を頑張ったところで、入試の点数は変わらないだろう。でも、人生においても大切なものを得ることもあるかもしれない。

実技科はその可能性を秘めているのに。

「芸術は、何も学校でなくても学べるでしょう。そんなものより学力の充実を図ったほうがいいと思いますけどね」

怒りで言い返したいことがうまくまとめられないうちに、新たな一撃が降ってくる。

——そんなものとは何よ、そんなものとは！

学校では勉強だけを教えればいなんてことがあつてたまるか！

「学力ならそれこそ塾なり予備校なりがあるでしょう!? あなたよりも立派な講師がたくさんそろっているでしょうしね！」

ポーカーフェイスを貫いていた山内の眉がびくりと動いたのを見逃さなかった。

そうなのだ。それこそ、学力を上げたいだけなら塾や予備校に行けばいい。

向こうの講師は百戦錬磨の、受験のプロだ。きっとこの男よりも遥かに的確な授業を行ってくれるに違いない。

ここぞとばかりに私が捲まし立てようとしたとき。

「もうそれくらいにしませんか、結城先生、山内先生。毎回そうやって会議の時間をロスしてしまうのはもったいないです」

嫌味の応酬を遮さかつたのは、化学科の高遠たかとという教師だった。

ノンフレームの眼鏡が似合う理知的な雰囲気、加えて端正な顔立ち。

私も山内も、彼の制止に従い口を噤つぶんだ。私たち二人にとって、彼の言葉には教頭のそれよりも重みがある。

というのも、高遠先生と山内、そして私は、いずれも二年生のクラスの担任を務めている。

同じ学年の担任ともなれば、行事などで日頃から顔を合わせる機会も多い。そういうとき、私と

山内の間にうまく入ってくれているのが、彼——学年主任の高遠先生なのだ。

私も山内も、何かとお世話になっている彼には頭が上がらない。

「ええと……まあ、すぐに結論が出る話でもないので、次回の会議までに各教科の先生や校長と熟考したいと思います」

私と山内が黙ったのを確認すると、すかさず教頭がまとめた。

結局、前回に引き続き今回も議論は持ち越したわけだ。

「次の議題ですが……」

これ幸いとはかりに題目は切り替わってしまった。おとなしく座るしかない……腰を下ろす瞬間、よせばいいのに、私と同時に着席しようとする山内のほうを見てしまう。

すると、向こうもたまたまこちらを見ていたらしく、視線がぶつかる。

「……!!」

アイツ……!!

間違いない、今、私のことを鼻で笑った。

デスクの下で、ぶつけられない怒りを握った拳こぶしに込める。

私は深呼吸をして怒気を静めながら、会議の終了を待ったのだった。

「結城先生、ちょっといいですか」

「あ、はい」

職員会議が終了し、解散となったあと。

高遠先生に呼ばれた私は、彼のデスクのある数学科・理科エリアへと向かった。

会議の終盤には、熱しやすく冷めやすい性格の私はすっかり落ちつきを取り戻していた——のに。

「……あ」

「……」

そこには高遠先生だけではなく、他の教師も数名いて——あの山内の姿もあった。

「すみません、すぐ済みますので……」

先ほどのやりとりを収めた張本人である高遠先生は、私にだけ聞こえるように告げながら眉尻を下げた。

面子シヅメを見ると、どうやら二年生のクラスを受け持つ教師が呼び出されたいらしい。学期の初めに行われる実力テストに関する連絡だった。

概要説明のプリントを配りながら、彼が口を開く。

「ご承知のことと思いますが、まだ二年生だからと悠長なことは言っていただけません。今の時期から緊張感を持って学習にあたることは大切です。しっかりとその旨を生徒たちに伝えていただきたい。私からは以上です」

この高校にはクラス替えがなく、特別なことがない限り、クラスも担任も三年間一緒だ。

このプリントを生徒たちに配るたびに一年の三分の一が過ぎているのだと思うと、時の流れの速さを実感する。

今受け持っている子たちも、ついこの間までは新人生だったというのに。

「またどこかのクラスが平均点を下げなければいいんですけどね」

私の思考を遮ったのは、わざとらしい棘のある一言だった。

「それ、どういう意味ですか!？」

発信源は一ヶ所しかありえない。私はソイツを睨みつけた。山内だ。

彼は口元を歪めて笑った。

「前回の実力テストを覚えてないとは言わせません。結城先生、あなたの受け持つD組の三科目の平均点は学年最下位でしたよね」

「っ……!!」

痛いところを突かれた。確かに……

我がD組の前回の試験結果はふるわなかった。

いや、前回だけではない。前々回も残念な結果に終わっている。

私が放任主義であることは確かだ。それは認める。こういうのは自分で危機感を持って臨まないといけないと思うから、あえて口煩くは言わないようにしているだけだ……それを差し引いたとしても、のんびりしている生徒が多いのかもしれない。

「ご、ご心配なく。今回は、だっ、大丈夫です!」

「自信があるなら結構。せいぜい他のクラス——特に、うちのクラスの足を引っ張らないようにしていただければね」

ちなみに山内のB組は昨年行われた三回とも、不動の一位だ。噂によるとヤツはテストの前、自分のクラスの生徒たちに相当なプレッシャーをかけているらしい。

純粹に生徒たちのためなら理解できるし、口を出すつもりはないけれど、自分のステータスのためだというなら人間的に尊敬できないやり方だ。

「だから、引っ張りませんって、余計なお世話よ!!」

それを知っていた私は、つい声を荒らげてしまった。

私のことなら構わないけど、大事な生徒のことを言われては黙ってられない。

「それなら安心です。情操教育に熱心なものいいですが、成陵はやはり名門進学校ですからね。その品位を汚さないようにしてください」

「……っ!!」

しれっとして嫌味を並べる山内に、我慢の限界を感じた。

私の熱伝導率は半端じゃない。せっかく気分を落ちつけたと思っていたところだったのに……先ほどまでの怒りが再燃する。

「ふ、二人とも。少し落ちついて下さい」

今にも爆発しそうな私を見かねた高遠先生がまた止めに入る。

「D組の生徒は授業態度も熱心ですし、レポートの出来もしっかりしています。真面目にコツコツ勉強するタイプの生徒が多いと思うので、ペーパーテストにもそのうちに成果が出てきますよ」

山内の様子を窺いながらも、高遠先生は私を慰めてくれる。そうだった、昨年はD組の化学を担

当してくれていたのだっけ。

「高遠先生……」

そう言ってもらえると救われる。校内でも一、二を争うデキる男だとは知っていたけど、本当に気の利く同僚だと感心してしまった。

「……さ、それじゃ、僕は失礼しますよ」

それに比べてこの嫌味男ときたら。

山内は言いたいことを言うと、さっさといなくなってしまった。

ああもう、イライラする……！

山内のヤツ……どうして、突っかかってくるのよ!?

かばってくれた高遠先生にお礼を言ってから、私は怒りの収まらないままに職員室を後にした。

「ただいまっ!」

苛立ちを引きずりながら美術室の扉を開けると、木製の引き戸は勢い余ってピシャリと派手な音を立てる。コの字形の校舎の突き当たりにあるこの部屋は、他の教室に比べて奥行きが広めで、その分、音の響きが無駄にいい。

すると、乱れなく並んだ机の後ろで、キャンバスと睨めっこしていた女子二人が「ひゃっ」と小さく叫び声を上げた。驚かせてしまったようだ。

「おかえりなさい、梓センセ」

「ご機嫌ナナメですね。会議で何かあったんですか?」

二人は揃って手にしていた絵筆やパレットを置いて立ち上がると、扉のそばへと寄ってくる。

成陵のトレードマークである深緑のブレザーではなく、戦隊モノのヒーローを連想させる作業用のツナギで現れた彼女たちは、私が顧問を務める美術部の部長だ。

五月の初めにあるコンクールに出展する油絵が仕上がらないとかで、最近は何日のようにこの場所を描き続けている。

「そうなのよ、あーもうっ、ホント腹が立つっ!」

職員室からの道すがら、山内に言われたことを反芻していた私は、いよいよ耐え切れずに鬱憤を吐き出した。

何よ、あの他人を馬鹿にした笑い方。それにあのチクチクした物言い!

「また山内センセですか?」

核心をついたのは、お洒落なベビーピンクのツナギ。部活の出席率ナンバーワンの長澤葉月だ。小柄で小動物系の顔立ちには、ゆらゆらと揺れる栗色のツインテールがよく似合っている。

成陵高校は私立の進学校にしては校則が緩いことでも有名で、制服こそあれど、髪色やピアス、メイクに関しては寛大だ。

のびのびとした自由な校風のなかで、勉学に励む——みたいな文句が、小難しい文言で生徒手帳に書かれていた気がする。

「正解。よく分かったね、葉月」

「あはは、だって梓センセが怒つてるときって、大抵は山内センセと採めたときじゃないですかー」  
何も難しい問題ではない、と葉月がにこやかに答えた。

「あの男つたらね、いちいちムカつくこと言ってくれちゃって。もう話になんないんだから！」  
「今回は何が原因だったんですか？」

扉を閉めつつ、会議中にため込んでいたストレスを晴らしていると、ネイビーのツナギ——黒髪  
のショートカットに紫のフレームの眼鏡が印象的な小泉真由が控えめに尋ねた。

幽霊部員が多い美術部だけど、真由と葉月の二人だけは熱心に活動している。彼女たちのおかげ  
で存続しているといってもオーバーではないくらい。

「……前にもちよつと話したことがあつたでしょ。新授業改革案の件で」  
「あー、実技の単位を減らして、その分英数国に回すつてヤツですか？」

職員会議で上った議題をむやみに生徒に伝えるのがよくないのは承知している。

でも、単位数の変更は生徒にとっても重要な問題。当の生徒の意見を聞いてみたくなり、頻繁に  
美術室へ出入りしている彼女たちには話したことがある。

「……いや、一方的に愚痴を聞いてもらったというほうがより正確かもしれない。もっぱら、山内  
への不満を吐き出しているだけ、というか。」

「そう。やっぱりあなた達としても、そのほうが助かるつて思うの？」

「んー……どうでしょうね。私たちは、ほら、美大に進学するつもりですから。実技の時間が減る  
のは困るんですけど」

「他の子たちの場合、進路に関係ないといえはばないですからねえ……」

二人は顔を見合わせてから、交互に首を傾げた。

「……そうか。そうよね」

ほとんどの高校がそうであるように、芸術の授業は選択制。一年から二年の間は、美術、音楽、工芸、  
書道から好きなものを選び、学ぶことになる。

当然、美大に行きたい者は美術や工芸、音大に行きたい者は音楽を選ぶことになるけれど、進学  
校の成陵で芸術分野の進路を選択する者は極端に少ない。

そういう生徒はどれを選んででも差し支えない上、さっきの山内の理論で言えば、芸術の授業が減  
ろうが減るまいが関係ない。それならいつそ減らしてしまえば、その分を他の授業に回して、学力  
を高めることができるんじゃないか、と。

「でも、いくら合格率を上げるためとはいえ、実技の単位を削つて主要科目に回すなんて……そん  
なの絶対におかしいじゃない！」

それじゃまるで、実技科目は必要ないみたいに聞こえてしまう。

『情操教育に熱心なものもいいですが、成陵はやはり名門進学校ですからね。その品位を汚さないよ  
うにしてください』

新授業改革案のことを思い返していると……山内の当てつけがましい一言も思い出して、それが  
また私の怒りを煽った。

情操教育に熱心で何が悪いわけ？ それが私の仕事なんだから当たり前でしょうが！

「まあまあセンセ。そんなにカッコしないで」

「そーですよ。美人な顔が台無しですよ〜？」

鼻息の荒い私を宥める二人。

私の傾向として、激しやすい割に平静に戻るのに時間がかからないことを熟知している彼女たちは、子供をあやすみたいに微笑みかけてくる。

「もう、大人をからかわないの」

「そんなんじゃないですよー。綺麗な黒髪ロングは美人の条件でしょう。モナ・リザだつてそうだし」

「……も、モナ・リザ？」

あのアルカイック・スマイルを思い浮かべながら、自分の髪を撫でてみる。

指摘されたとおり、センターパートの前髪に、胸の下まで伸ばした黒いロングヘア。重たく見えないように毛先にはレイヤーを入れている。

私が入み以上に気を遣い、かつ評価されているパーツだと言つていいと思う。昔から、髪は綺麗だと褒められていたから。

「……でも、モナ・リザとは。」

葉月はちよつと他人とずれている部分がある、いわゆる『天然』な子だ。

本人としては褒めたつもりなのだろうけど、いまいち嬉しくない。

「葉月ちゃん、その例えはジミヨーじゃない？」

言葉を詰まらせる私を見て、真由がフォローをしてくれた。

「モナ・リザは置いておくとして……でも、黙つていれば大和撫子風で可愛いのにーつてウチの担任も言つてましたよ」

「……黙つていればつて、そう言つてたのね？」

「あつ」

苦笑しながら尋ねると、嘘をつけない性格の真由は「しまった」と口元を手で押さえた。

三年生の真由の担任が誰だかは忘れてしまったが、会議のたびに山内とぶつかつてるせいとか、おおよそ他の職員からは生意気だとか面倒な女だとも思われているんだろう。

それでも構わない。

実技科の先生方は皆、私と同じように新授業改革案に反対しているのだけれど、先ほどのような会議の場で意見を述べる事ができる先生はほぼいないと言つていい。

なぜなら、不思議と実技科には新任だつたり経験が浅い、立場の弱い先生が多いからだ。

さらに言えば、教師の人数は実技科に比べれば主要五科のほうが遥かに多い。

数のせいで負けるなんてことがないように、在任七年目の私がしつかりと意見を言つておかなければ。

「黙つていれば、といえはですよ」

真由が作った間を埋めたのは葉月だ。

「山内センセも見た目はいいセンイつてると思ふなあ」

想像の中で彼の姿を描いているのか、彼女は天井を見上げるようにして言った。

「あの人が？」

「はい。山内センセ、まだ結構若いじゃないですかあ」

「……歳はね。私と同一歳だから」

私も彼も、今年で二十九歳。

まだ若い……と言ってもらえる範疇はんちゆうであると信じたい。

世間一般の学校ならまず間違いないと思うけど、この成陵高校は校長の意向で、私たちが若い先生方も多く勤めている。

年齢が近いためか、葉月や真由のようにファーストネームで呼んでくれる生徒もいて、こんな風にフランクな会話ができるから、個人的には堅苦しくなくて楽だ。

「でもそんなこと言うなんて、葉月も趣味が悪いなあ」

「えー、ルックスも苦手ですか？」

「うーん……」

葉月を真似て、上を仰いだ。

白状すると、苦手……ではない。

私はふくよかな男性があまり好きではない。美大時代の男友達は栄養失調かと心配になるくらい、こぞってヒヨロリとしていたので、それが影響しているのかもしれない。

山内はどちらかといえば痩せ形で、身長は一七〇センチ前半。まあ普通だ。

ややこけ気味とも言える頬で、鼻梁びりょうは高く、目尻のほうが幅広の奥二重おくふたえの双眸そうまうには強い意志が宿っ

ているように感じられる。エネルギーなクリエーターに通じる雰囲気があり、そんな顔立ちは嫌いじゃない。

……が、あくまでそれは顔の印象に限定した話。

それを帳消しにする性格の悪さを知っているために、すんなり認める気にはなれないのだ。

「授業もめっちゃくちや評判なんですよお。特に、三年の選択授業」

「ああー、『数学C』でしょ？うちのクラスでも抽選くくせんに漏れた子、いっぱいいました」

二人がうんうんと頷うなづいて言う。

この成陵高校一番のウリは、三年次の特別な授業形態にある。

一年次、二年次のうちは文系・理系のすべての教科を履修することが基本だ。

たとえば私大の文系学部を目指すことが早々に決まっても、数学A・B・I・II、生物I・II、化学I・II、地学I、物理I……など、一通り履修しなければならぬ。

ところが三年次になると、開講される様々な授業を自分の受験科目と照らし合わせ、好きに履修することが可能となる。一年早く大学の授業を体験できると言えばわかりやすいかもしれない。

三年は勝負の年。どの教師の講座をとるかで運命が変わると言っても過言ではないので、一つの講座に生徒の気が集中することも珍しくない。

そういう講座では三十名なら三十名と定員を決め、抽選で受講者を決める。山内もそんな人気教師のうちの一人なのだ。

「センター試験を受けたセンパイが、山内センセの作った予想問題が役に立ったって言っていました

から、今年の倍率は余計に増したんじゃないですかね」

「ふうん、そう」

自ずと返事のトーンが低くなる。複雑な気分だ。

山内は生徒たちに求められている。

成陵の生徒が重要視しているのは、受験に直結した授業をしてくれるかのみだと言われている気がして……面白くない。

「山内センセは講義もいいけど、質問しに行くともっといいなって思いますよ」

山内の薄笑いを頭の中から追い払っている、葉月が言った。

「葉月ちゃん、質問しに行ったりとかするの？ 偉いね」

確かに。休み時間に質問に行くタイプには見えない——と言ったら悪いかもしれないけど、真由の意見に賛成だ。

「あはは……えっと、一回だけ赤点取っちゃったからね」

葉月は恥ずかしそうに舌を出しつつ「でも」と続けた。

「講義が厳しいからビクビクしながら行ったんだけど、一対一だと意外と優しいんだなって思ったよ。こつちが納得するまで丁寧に教えてくれるし——」

葉月の話を聞きながら、私の意識は記憶のアルバムの中の一ページにトリップしていた。

『分数のわり算って、よくわかんないんだもん。むずかしいよ』

『しかたないなー、まず、このばあいは……』

テーブルの上には、B5サイズのテキストと、幅広の罫線が入ったノート。

頭と頭がくつつきそうな距離で、私にわかるよう一生懸命に途中式を走らせている男の子の姿が、おぼろげに浮かび上がる。

『すごい。できた』

『な、カンタンだろ？』

手品でも見たように手を叩く私を見て、彼は得意気に鼻を擦りながら満面の笑みを見せる。

私の大好きな笑顔を。

「……そういうところは、変わってないんだなあ」

「何の話ですか？」

真由が首を傾げた。葉月も不思議そうに私を見ている。

「ううん」

無意識に余計なことを口走っていたみたいだ。

居心地の悪さを振り払うように備え付けの時計に視線を滑らせる。

「そうだ、もうすぐ実力テストでしょう。部活もいいけど、テストも頑張つてよね。受験生の邪魔してるなんて言われちゃ、さすがに私もヘコんじゃう」

つい先ほど、そんなプリントを貰ったばかりだった。

彼女たちは三年生なのだから、もういい加減、受験勉強にも力を入れなければならない時期だ。

「ええ、もうですか？」

「これからノツてくるとこだったのにー」

二人とも、眉をハの字にしながら不満げに言った。

顔を合わせて作業するためのなのか、キャンバス同士は背を向けるように置かれていた。多分、サイズはいずれも十五号。

持って帰るのは大変だから、学校で描くことにしているのだろう。

「気持ちにはわかるけど、あとで泣くのはあなた達なんだから。……全く、三年まで部活を続けるなんてよっぽどの物好きよ」

挙げ句、彼女たちは夏まで続けるつもりだと言う。美大志望とはいえ、ご苦労なことだ。

私だって本当は好きなように描かせてあげたい。私も、受験期には机でなくキャンバスに向かつていたから、なおさら。

だけど、私にも立場つてもものがある。この学校の教師である以上はちゃんと勉強もするように促さないといけない。

「はい。じゃ、そろそろ片付けようか、葉月ちゃん」

「うん、そうだね」

それは二人も理解してくれているらしい。

聞きわけのいい返事をする、彼女たちはイーゼルを畳んだり、絵筆をクリーナーに潜らせたりして、帰宅の準備を始めた。

絵の具や油で汚れたツナギから制服姿に戻った二人を送り出し、一人きりになった美術室の中。

石膏像や画集などが積まれた教卓の椅子に腰掛けると、ふうつと息を吐いた。

「……そういうところは変わってないんだなあ」

そして、何気なく。さきほど口走ってしまったフレーズを繰り返した。

葉月たちにごまかしてしまったのは、知られたくなかったからじゃない。

……私にだってまだ信じられない。いや、信じたくないのだ。

ゆっくりと瞼を伏せ、引き寄せたのは形のないアルバム。

開いたままだったそのページにもう一度思いを馳せる。

『あずさは本当に算数がニガテだな』

『分数のわり算って、よくわかんないんだもん。むずかしいよ』

『しかたないなー、まず、このばあいは……』

『すごい。できた』

『な、カンタンだろ?』

『ありがどう、こうちゃん。こうちゃんは、おしえるのがじょうずだね』

私の初恋の人——こうちゃん。

同じクラスの誰よりも頭が良くて、正義感があつて、面倒見がよくて。

自慢の幼なじみだった彼を、生まれて初めて異性として好きになった。

あの頃は本当に楽しかった。

こうちゃんと一緒に見るもの、触れるものすべてが、太陽の光に透けた水飛沫みずしぶきみたいにキラキラしてて、眩まよしかった。

だけどその想いを伝える機会もないままに、彼はいつしか別人のようになってしまっていた。

こうちゃんのフルネームは、山内孝佑こうすけ。

——あの数学科の山内こそ、私の大好きなこうちゃん、その人だったのだ。

2

その職員会議から数日後——

「へえ、じゃあ月島先生と千葉先生は小学校からのお友達だったんですね」

場所は、成陵高校近くの繁華街にある、洋風居酒屋の個室。

個室といっても座席は四人掛けのテーブルの端を繋ぎ合わせただけで、席の切れ目ごとにそれとなく会話も分散している状態だった。

私は正面に座る彼女たちを見比べると、周囲の笑い声に掻き消されないよう、少し声を張って驚いてみせた。

「そうなんです。教師としては、月島先生よりも一年出遅れてしまったんですけど」

恥はずかしそうな笑みを浮かべながら答えたのは、私から見て斜向はすむかに座る千葉先生。

今年、成陵に着任したばかりの新しい先生で、担当は家庭科だ。

茶髪のスパイラルパーマがよく似合い、華やかで凛とした彼女は、いい意味で家庭的なイメージからはかけ離れている。グラスの中身を飲み干す白い喉までもが眩しく、美しい。

今夜は、この千葉先生をはじめとした新しい職員方の歓迎会なのだ。

「で、でも千葉先生、全校生徒への挨拶も堂々としてたし、すごいなあって思った。……私なんか最初の挨拶は緊張して、声が震えちゃったもの」

アルコールに弱いのか、頬を赤く染めながら真正面で左胸に手を当てているのが月島先生。昨年、この成陵にやってきた音楽科の教師だ。

黒髪で丸みのあるボブが童顔を引き立たせている彼女は、千葉先生とは逆に、おとなしくて守ってあげたくなる雰囲気がある。

職員室のデスクが隣なので、ランチが一緒になったときはよく話す。

「でも、長い付き合いの幼なじみと同じ職場だなんて、面白いのね」

「はい。学生時代に戻ったみたいだよねって話してたところです」

「うん、ねえ。こういうパターンって、めったにないでしょうから」

私は焼酎のグレイプフルーツ割りを片手に額うなずきながら、横目で肩を並べる人物を見た。

ソイツは聞いているのかいないのか、素知らぬ顔でビールをあおっている。

……ここにも一組います、なんて言ったら驚かれるだろうな。

いつもは、こういう場では他の教師が気を利かせ、『混ぜるな、危険』とばかりに私と山内を離

してくれる。それも、お互いの顔が見えない位置にしてくれるという徹底ぶり。

本当はそこまで緊迫した関係じゃないけど、周囲はそういう目で見ているということだろう。

普段ならばもつと距離を空けてもらえるはずが、タイミングの問題なのか、はたまた何かの手違いなのか、まさかの隣同士。ありえない席順となってしまった。

できることなら入店まで時間を巻き戻したいと思っただけど、所詮は後の祭り。おめでたい席だし、今は極力、空気が悪くならないように努めるだけだ。

去年一年間、私と山内の仲の悪さを嫌というほど見てきたであろう月島先生もこの空間に緊迫感を感じているらしく、私と山内を見る目が明らかに怯えている。

新任の千葉先生がいるにもかかわらず、あえて仕事の話はしないように気遣つてもくれて——職員会議での応酬を無駄に繰り返すことがないように、だ。

窮屈な思いをさせてしまって、彼女には申し訳ない。

「そういえば、山内先生って美園高校のご出身だったんでしたっけ？」

そんななか、千葉先生だけは物怖じしない軽快な話しぶりだった。

「はい」

山内がジョッキを置きながら頷く。

「美園って、成陵に負けず劣らずの名門校じゃないですか。すごい、尊敬しちゃいますね」

「ありがとうございます。でも、それほどでもないですよ」

暗黙の了解で、私が会話に参加しているときは山内が貝になる。今は山内が話しているので逆の

パターン。

山内のヤツ、私には嫌味でネチネチした反応しかできないくせして、他の職員とは至って平和に会話を成立させている。相手が大学を出たばかりの若くて綺麗な女性だと、余計にそうなんだろう。

私には見せない微笑——もちろん、善意のつて意味で——なんかを見せたりするあたり、私って相当嫌われているんだな。

ふん、余裕ぶつた謙遜なんかしてるけど、こっちは知ってるんだから。

その高校に入るため、睡眠時間を三時間まで減らして勉強してたこと、内申点を上げるために、苦手だった音楽や美術の授業も必死に頑張ってたことも。

特に、写生会ときは私の絵を参考にしたいからって、わざわざ男の子のグループから抜けて一緒に描いたこともあった。

……そんなの、口が裂けても言わないけど。

「そういえば来月からモネの美術展が始まりますね。結城先生もやっぱり行かれるんですか？」

山内のことは千葉先生に任せたとばかりに、月島先生が私に話しかけてくれる。

「そのつもりです」

私は頷きながら言った。

「そうですか。私もまた、会期中に一度は行きたいなって思ってるんですよ」

「また」と言うあたり、過去のモネ展に足を運んだりしているのだろう。

彼女も芸術科の教師なだけあって、音楽だけにとどまらず絵画の世界にも興味があるらしい。

「結城先生は、モネに憧れて絵を描かれるようになったんでしたっけ」  
「ええ。覚えててくれたのね」

以前、何かの折にその話をしたことがあった。  
あれほど強烈な感覚に陥った経験はなかったなあ——と、当時を振り返る。  
太陽が照りつける夏の暑い日。初めての課外授業で訪れた美術館の中は、午前ということもあり人もまばらで、空調もよく効いていた。涼しい風が汗ばんだ肌を包み込み、火照った身体を優しく冷やしてくれる。

催しは『印象派の画家展』というようなものだったと記憶している。その展示の一角で、私は運命の出会いをした。

まだ小学一年生だった私には、難しいことはわからないし、専門的な知識もなかったけど、その色遣いが、存在感が、私の思考のすべてを奪っていったのだ。

彼の名前はクロード・モネ。フランスの画家だ。私は、一目で彼の作品の虜になっちゃった。  
特に惹きつけられたのは、名作『日傘を差す女』。

そして——

『それじゃあ、わたし、「がか」になる』

『なれるよ、ぜったい』

『ほんと？』

『うん。ぼく、あずさの絵、すきだよ』

物心ついた頃から一緒だったこうちゃんに、何故かドキドキしたあの一瞬。  
心から後押ししてくれた彼に、特別な想いが芽生え始めたのだ。

こうちゃんへ恋心を抱くようになっても私たちは変わらず仲よしで、女の子の友達からの誘いを断って彼と遊ぶことも多かった。

小学校から帰ると、ランドセルのままどちらかの家に入り込み、宿題をしたり、ゲームをしたり、おやつを食べたりして日暮れまで過ごす。

「あずさは本当に算数がニガテだな」

「分数のわり算って、よくわかんないんだもん。むずかしいよ」

「しかたないな、まず、このばあいは……」

私はこうちゃんとは真逆。勉強がからきしできなかったから、一番苦手だった算数を中心によく教えてもらったっけ。

「しかたない」と口では言いながらも、私が納得するまで根気よく付き合ってくれた。

「すごい。できた」

「な、カンタンだろ？」

「ありがとう、こうちゃん。こうちゃんは、おしえるのがじょうずだね」

こうちゃんは物事を理論立てて説明するのがとてもうまかった。

葉月や真由が口にしていただけとおり、成陵高校の数学科の中でも授業の人気が抜群に高い彼は、当

時からその才能を遺憾なく發揮していたと言える。私は、この頃から教師に向いているんじゃないかと思っていた。

彼のもう一つのすごいところは、飽くなき探究心だ。

「あずきが好きだって言ってたから、モネについてべんきょうしてみたんだ。そしたら、おもしろいことがわかったよ」

お父さんがプログラマーだったこともあり、コンピュータの類たぐいをいじるのが好きだったこうちゃんも、当時まだそれほど普及していなかったインターネットを扱うのも大得意だった。

私が新しい趣味や興味の対象を見つけるたびに、彼も一緒になって調べてくれる。このときもそうだった。

「えっ、なあに？」

「あずきが気に入ってた絵、あつたろ。あの、おんなの人がカサをさしてるやつ」

「うん」

こうちゃんは得意げに人差し指を立てた。

『「ひがさをさすおんな」っていうんだけど、あの絵、じつは三まいあるんだ」

「三まいも？」

「どれもにってるんだけど、ほかの二まいはモデルがちがうんだ。おいてあるばしょもべつのところみたいだよ」

「どこどこ？　みにいきたい！」

「えーっと、フランスのびじゅつかんだって。…：うーん、いくのは、むずかしいな」

「えー！」

先日は学校の課外授業で見ることができたのだし、まさか海外とは予想もしていなかった。そんなに遠く離れたところへ見には行けない。

「フランスかあ…：とおいんだね。ざんねん」

昔からすぐ顔に出ると言われていた私のことだ、よほどガツカリした顔で落ち込んでいたのだろう。

「じゃあさ」

そんな私を見たこうちゃんが言った。

「いまはダメでも、おおきくなったら、いつしよにみにいこう。フランスに」

「こうちゃんといっしょに？」

「うん。ぼくがあずきをつれていってあげる」

「…：うん！」

思えばこんな小さな頃から、こうちゃんは頼もしかったんだなあ。

私のために背伸びをしてそう言ってくれたこと——今でも思い出すと顔が綻ほころんでしまう。

中学生になると、クラスが離れてしまったことや、お互い部活に入ったことなどで、話す機会はや減った。

私は美術部、孝ちゃんがコンピュータ部。文化系の部活だし厳しいというほどのものではなかつ

たけれど、この頃になると異性と付き合い始めるクラスメイトが出てくる。

男子と女子とがあまり表だって仲よくしていると、冷やかしの対象になってしまいがちで、私と孝ちゃんもその典型だった。

「結城さんって、隣のクラスの山内くんと付き合ってるってホント？」

「え？」

尋ねてきたのは、同じクラスで噂話の好きな女子。

私の想いを見透かされたみたいでドキッとした。

孝ちゃんを好きなのは本当だ。

でも、ずっと心の中に秘めていたことだし、孝ちゃんが私をどう思っているかなんて知らない。

意気地なしの私は、幼なじみという関係を壊したくなくて、ただの一度も自分の想いを彼に告げることがなかったから。

「違うの？ たまに一緒に帰ったりしてるじゃん」

「そ、それは……家が近いから」

「それだけ？」

「う、うん」

「なあんだ、そうなの」

答える前は嬉々とした表情を浮かべていた彼女が、興味が失せた様子でふん、と鼻を鳴らす。

思春期なのだから別段珍しい会話ではなかったのかもしれないけど、周囲が私たちの関係に関心

を持っていることを知って、心にさざ波が立った。

孝ちゃんと仲良くしていたらいけないんだろうか、とか。

変な噂がたつたらどうしよう、とか。

そういうことが続いたら嫌われてしまうんじゃないか、とか。

だから――

「梓」

美術室の窓から見える空の色が、オレンジから薄青に溶けていく時間帯。

キャンバス上の林檎にカーマインを重ねていると、前方にある開けっ放しの扉の外から私を呼ぶ声がする。

描きかけの静物画から視線を外し、その声の主を探した。

「孝ちゃん」

木の椅子から立ち上がると、まずは周りを見渡した。室内に誰もいないことを確認してから扉まで歩いていく。

部員が少なくて気分次第で出欠を決めることができる自由な部活だったこともあり、その日は私を除いて皆帰宅していたのを知っていた。

でも、例の女子生徒に言われたことが、魚の小骨のように脳裏から離れない。

「どうしたの、部活は？」

「今日はもう終わった。梓は？ 他に誰もいないみたいだけど」

言いながら、孝ちゃんは室内を覗いた。

授業で制作中らしい手の石膏や篆刻などが、棚やロッカーの上にはずらりと並んでいるけれど、人影は私のそれ一つだ。

「今日は皆、先に帰っちゃったんだ」

「そうなんだ。……母親がさ、梓を、たまには夕飯に呼んだらって言ってたんだけど、どうかな？」

「佐津紀さんが？」

佐津紀さんというのは孝ちゃんのお母さん。

『孝ちゃんのおばさん』と呼ばれるのが嫌みたいで、名前で呼んでと言われて、そうしていた。

朗らかな優しい人で、いつもニコニコと笑っている愛想のいい女性だ。

私のことを娘のように可愛がってくれたな。「梓ちゃんみたいな女の子が欲しかったわ」というのが口癖なくらいに。

「んー……」

本当なら、二つ返事で遊びに行きたかった。

中学に入ってからゆっくり会う機会もなく、勉強のこと、クラスのこと、今描いている絵のこと——話したいことはたくさんあった。

でも、下校途中、二人でいるところを誰かに見られたら、また何か言われるんじゃないか。

そうしたら孝ちゃんが私を煙たがるようになるんじゃないか。

思いこみにも近い余計な心配が頭をチラついて、私は首を横に振っていた。

「ごめん、もうちよつとあれを進めておきたいんだ」

あれ、と指差したのは、ついさっきまで向かい合っていたキャンバス。

「そう。じゃあ少し遅くなっても構わないよ。それなら大丈夫だろ？」

孝ちゃんは、「へえ」という顔をしながら、扉の境界から足を踏み入れると、キャンバスのほうまで歩いていく。

「うーん……ごめんね、やっぱりやめておく」

私は、彼に身体を向けつつも、視線は逸らしていた。

「そっか……ん、わかった。仕方ないよな」

残念そうにしながら、描きかけのキャンバスを覗き込む孝ちゃん。

「——今は何を描いてるんだ？」

「林檎。ほら、前に話したでしょ」

キャンバスから手を伸ばせば届く距離。古びた木の机を指し示して言った。  
籐の籠の中に、様々な品種の林檎が収まっている。

私たち美術部は、ある財団法人主催の展覧会に出品することになっていて、私はその作品を仕上げている最中だった。

何を描こうか迷ってしまい、題材が決まらなかったのだけど……よく図書室で眺めていたモネの画集から、赤と青、二色の林檎を描いた『林檎の入った籠』を見つけ、林檎なら手ごろでオーソドックスなモチーフだし、彼への敬愛の意味も込めて同じ題材にしてみようと決めた。

光の画家というだけあり、自然光を追究した風景画が多い彼には珍しい静物画。その存在を知り、一番の話し相手だった孝ちゃんに話さずにいられなかった。

「モネと同じモチーフにしたって言ってたヤツか」

「うん」

「画材は？」

「アクリル。今回は、あんまり時間がないからね」

モネのような画家を目指していた私はとりわけ油彩に強い関心を持っていて、少ないお小遣いで少しずつ油絵の画材を揃えていた。

油絵の具と違い、水で溶くアクリルガッシュは乾くのも速く、重ね方によっては油絵にも似た風合いを出すことができる。

とはいえ、どうしても油絵ほど重厚な質感は出せないからちよつと物足りない気もした——仕方ないか。描き始めが遅くなってしまったんだから。

「頑張れよ。梓の絵ならきつといいところまでいくって」

「……そうかな」

「ああ。僕は梓の絵が好きだって、ずっと言ってるだろ」

一瞬、時が戻ったのかと錯覚するくらい。

小学生の時と変わらない笑顔で、孝ちゃんが微笑<sup>ほほえ</sup>んでくれた。

……変わらない。

私たちの関係は変わらないのに、知らず知らずのうちに周りだけが変わっていく。

——大人になっていく。

中学を卒業すると、秀才だった孝ちゃんは私立の進学校である美園高校へ。相変わらず勉強が苦手だった私は、偏差値が中の下くらいの公立高校へと進学した。

この頃になると、私と孝ちゃんはめつたに顔を合わせなくなっていた。

学校が別々になり生活圏が離れたこともあるし、お互いに同性の友人と付き合う機会も増えたら。

けれど本当のところは、孝ちゃんを避けているのを悟られてしまったからではないかと思う。

もちろん、孝ちゃんが嫌いになつたからではない。好きだからこそ、彼との距離のとり方がわからなくなつてしまったのだ。

登下校のとき、人ごみの中に孝ちゃんの姿を見かけることがあつたけど、美園の制服を着ている孝ちゃんは私の知らない男の子のように見えた。

身長も、肩幅も、顔立ちも、手のひらも。

毎日会つてるときは気づかなかつたけれど、少しずつ大人の男性になっている。そんな彼と、私の中の孝ちゃんがうまくリンクしてくれない。

だから、駅や近所で孝ちゃんを見つけることがあつても、私からは声をかけることはなかった。そんな折だった——父親から急な転勤を告げられたのは。

住み慣れた都会から田舎へ引つ越さなければいけなくなつたわが家。高校も転校せざるを得なく

なり、孝ちゃんとも離れ離れになってしまう。

いっそ、これを機に孝ちゃんに告白をしようかとも考えた。

でも、妙にギクシヤクしている当時の状態では踏み切れなかったし、いなくなってしまう私から想いを告げられたら、逆に迷惑かもしれないとも思えて。

結局、孝ちゃんには引越すことすら伝えられずに――

「……結城先生？」

孝ちゃんと共に成長してきた学生時代。その場面場面が、映画のフィルムみたいに頭の中で再生されていた。

月島先生の声で我に返った私は目を瞠る。

「どうかしましたか？」

「……いえ、何でもないので。少し酔ったかな」

「絵画もいいですよ。高尚な趣味って感じで憧れますよ」

私が少しおどけて言うと、それまで山内と話していた千葉先生がこちらの話題へ加わってきた。

「山内先生は絵画とか興味ありますか？」

そしてそこに、山内をも加えようとする。

私は悪いことでもしているみたいに身体を硬くしながら、耳をそばだてた。

彼は首を捻ったりしながら、

「……さあ。僕はそういうのに滅法疎くて。さっぱりです」

嘘つき、と内心で毒づいた。

モネはもちろん、印象派と呼ばれる画家……例えば、マネやセザンヌ、ゴッホ、ルノワールなんかの有名どころの作品については、得意のパソコンで調べてもらったりもしましたし、特別展が開かれる際は一緒に美術館へ見に行ったりしたこともあった。

孝ちゃんは作品そのものを楽しむというより、画家のバックグラウンドに興味があるように見えた。

なかでも特に関心を寄せていたのはゴッホで、「あれくらい常軌を逸しているからこそ、芸術家でいられるのかもな」みたいなことを言っていた。同時に「梓はそんな風にならないでくれよ」と念を押されたりもしていたな……まあ、自分の耳を切ったりする人と一緒にされても困るわけですけど。

画材についても私が使っていたものは一通り把握しているはず。

水彩、油彩、間をとったアクリル、ちよつとマニアックな岩絵の具――よく使うメーカーや欲しい色など、もっぱら私の話相手をしてくれていた彼は、嫌でも覚えてるに違いない。

つまり、何が言いたいのかという点、嗜む機会がない人に比べれば間違いない詳しいはずなのだ。それなのに、山内は「知らない」「わからない」「興味がない」というスタンスを崩さない――それは会議でも同様。

実際のところ、本当に興味がなかったのかもしれない。それでも、仲が良かった頃は上辺だけで

立ち読みサンプルは  
ここまで

も楽しんでくれていたと思っていたのに。

間接的なやりとりなのに、山内から突き放された感じがした。

わかってますよ。きつとそんな日々もなかったことにしたいんだね、そっちは。

私たちの関係を知る人がこの場にいないのは、彼にとつて都合がいいんだ。

「そうなんですか。じゃあ私と同じですね」

千葉先生の笑顔に応える山内の姿が目に入る。

薄めの唇が綺麗に弧を描く、愛想のいい笑み。

……何よ。そんな顔もできるんじゃない。

昔みたいに笑えるんじゃない——私が相手じゃないのなら。

晴れて美大に合格し念願の油絵学科に進んだ私は、美術科の教師になった。

それまでは愛してやまないモネのような、いわゆるフインアートの画家を目指していたけれど、これが想像の何百倍、何千倍も難しい世界だった。

美大在学中に、いくつかの美術賞に出品してみたりしたけれど、ずば抜けた才能のない私の作品は箸にも棒にも引つかからず——まあ正直、そのくらいの歳には、フインアートで成功するなんて夢のまた夢、現実味のない話だと理解していたから、路頭に迷うことのないように教職の資格を押さえておいた。それが正しい選択だったと今は言える。

コマーションルアートの方面で就職を考えてみたら、と友人に勧められたこともあった。確かに好きな絵を仕事にできるのは魅力的だし、そちらで稼いでいる先輩方も結構いたけれど……私の芸術の原点はクロード・モネ、つまりフインアートの世界だ。できることなら、そちらに近い世界で働きたい。

私がモネ、ひいては印象派の世界に陶醉したように、彼らの作品の素晴らしさを伝えることができたなら、それも素敵なことじゃないか、と。

教壇に私立成陵高校を選んだのは、名門校だからというブランド志向からではなく、若い教師を積極的に採用していたからだ。

校長はエネルギーが豊富な人で、職場の若返りを図っているらしい。勤めてみて、なるほど二十代から三十代の先生が他の高校に比べずいぶん多いように思う。生徒も素直で真面目な子が多く、充実した日々を送っていた。

そんな教師生活五年目——孝ちゃんとの再会は突然だった。

約十年ぶり。しかも、いかにも社会人らしいパリッとしたスーツ姿の彼を初めて見たものだから、最初は同姓同名の別人かと思っただけ。

けど間違いなかった。かつて隣に住んでいた幼なじみの山内孝佑、その人に。

「久しぶり。私のこと、覚えてる？」

「……」

職員室での挨拶を済ませた彼を捕まえ、声を弾ませる私。